

伝統的書写指導の誤解と問題点の指摘Ⅲ

—数的優位の方法を反転させ、数的劣位の側の対応とする矛盾について—

(平成 28 年 8 月 31 日受付, 11 月 4 日受理)

Pointing out Misunderstandings and Problems about the Traditional Instruction of Penmanship Ⅲ

—About the contradiction of the teaching method to cope with small numbers by turning over the way of large numbers—

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科

小竹 光夫

SHINO Mitsuo

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科

竹中 優志

TAKENAKA Yuji

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：書写教育，左手書字，学習指導上の工夫

Abstract : As for school education, equality in education should be guaranteed. However, in penmanship education we find much difference between right-handed students and left-handed students. The main reason is that we often apply the teaching method of right-handed students to the teaching method of left-handed students by turning over simply. I would like to point out that we can't solve the problem by just reversing the method of right-handed person. Because, the movement characteristics of fingers differ greatly to a right-handed person and a left-handed person. Moreover I am going to argue about the direction of the future of the penmanship education to a left-handed person.

Keywords : Penmanship education, Left-handed penmanship, The device on educational guidance

はじめに

学校教育のみならず，一般の社会生活においても，数的優位を占める側が主導の立場をとり，数的劣位の側はさまざまな事情・状況はあるにせよ従わざるを得ないというのが現実となっている。ただし，この「優位」や「劣位」という表現自体が，「数的」という語を伴わない限り誤解を生じさせることは明らかであろう。数的多少を言っているに過ぎない表現であるにもかかわらず，質的内容をも想起させるという語弊・誤解は，質的優劣にまで言い及んで，他者を蔑視する傾向さえも生じさせている。例えば，本論のⅡで扱った

左手書字の児童生徒に対しても，右利き・左利きという対等の呼称でない特異な別称が，未だ社会の中に散見されるのが実状であろう。数的優位の側，つまり多数を占める側が社会を主導しやすいことは否定できないが，最大多数の幸福が全員の幸福に繋がるという保障はない。特に学校教育においては，数的劣位の側，つまり少数の側も平等，かつ均等な教育を受けるという権利を有していることを忘れてはならない。そこには，当然のこととして人間教育という視座から，学習者や学習指導，教育を見つめていく指導者としての確固たる理念が存在していなければなるまい。

そこで本論においては，学校教育における数的優劣

が生じやすい内容等について、どのような学習指導が展開されているのかを明らかにすることから始め、特に課題が多い左手書字へと論を及ぼせようと考えている。それは学習指導が数的優位の側の説明に終始し易く、数的劣位の側に単純かつ規則的な「反転」や「逆転」によって活用を促進させようとするのでは解決がつかない、根本的な誤解が存在していると考えからである。多くの学校現場で導入される「右手書字の方法を、左手書字に転移させて活用しよう」という安易な指導法の問題点を明らかにし、指導上の新たな工夫を提示しようと考えている。

I. 数的優位の方法を応用し、活用しようとする問題点

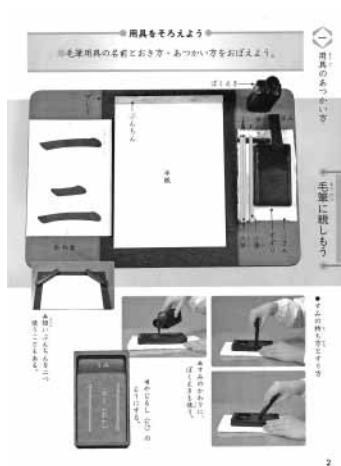


図1 『小学書写 3』
教育出版株式会社刊

の部分であろう。

図1は、右手書字の場合の機能や教室での基本的な所作を押さえた、いわば定番とも考えられる題材である。当然、教室内では図をもとに確認が行われ、毛筆書写の実習が開始されることになる。しかし、図に関して、または補助として発行される指導者用の教授資料にも、これが「右手書字の学習者用である」との但し書きは付されていない。指導者となれば、左手書字の学習者に配慮して助言・指導を行うのが当然であろうが、その当然という事柄が実施されていないため、大学生になっても図のままの配置で書写する左手書字の学習者が存在する。

欠落しているのは、以下に掲げる図2の「左手書字の学習者用に反転したもの」である。情報機器等々が発達した現代においては極めて容易な作業で提示資料を作成できるが、それが不可能なのはページ数等々にまで教科書編成上の基準が設けられているからで、こ

の図のために1ページを割くことはできないのである。つまり、総ては学習指導を行う指導者の一言に「期待」していることになる。書字・書写する上での機能から考えれば、数的劣位の学習者への配慮の有無が、学習の成否を左右することになろう。



図2 左手書字の学習者用に反転したもの

二 ひらがなのがくしゅう ■ますめのなかのかくところ P.16・17 7月 1時間扱い
本時の目標 ○描音・促音の大きさや書く位置について理解し、正しく書くことができる。

学習活動	指導・支援の展開の留意点	評価の観点
1. 目標設定 ●本時の目標を知る。 描音・促音を正しく書く学習であることを知る。	小さくかくじにきをつけてかこう。 ○空書することによって、書き順や送筆・終筆の書き方を確認する。 ○姿勢・鉛筆の持ち方の確認をする。	描音・促音の書き方についての学習であることを理解できたか。 (知)
2. 活動 ●『むぎちゃ』『ちきゅう』『きって』を空書してから試書をする。	○空書することによって、書き順や送筆・終筆の書き方を確認する。 ○姿勢・鉛筆の持ち方の確認をする。	よい姿勢・鉛筆の持ち方で書こうとしているか。 (関)
3. 指導 ●描音・促音の書き方を確認する。	小さい『っ』『ゃ』『ゅ』『ょ』は、ますの四分の一の大きさにする。 『2のへや』に書く。 1 2 3 4	描音・促音の書き方の基準について理解できたか。 (知)
4. 練習 ●基準に気をつけて、『むぎちゃ』『ちきゅう』『きって』を練習する。	○字の大きさによって違う意味の言葉になってしまうことを教科書P.16の『びょういん』『びょういん』を例に確認する。	基準を確認しながら、正しく書くこととしていたか。 (関)
5. まとめ ●『ちきゅう』『むぎちゃ』『きって』をまとめ書きし、試書と比べ、よくなったところを発表し合う。	○ます目の中心に文字を書いてしまうことのないように、十字の補助線の入った練習用紙で練習しながら、文字の大きさをつかめるようにする。 ○試し書きと比較し、よくなったところを認め合い、意欲を高めることができるようにする。	描音・促音の書き方を理解して、正しく書けたか。 (技)
6. 日常化 ●教科書P.17の『おきなかな』を、描音・促音に気をつけて書く。	○練習した言葉以外でも、小さく書く字に気をつけて書いているか声がけしていく。	小さく書く字を意識して書こうとする意識をもてたか。 (日)
本時の評価 ○描音・促音の大きさや書く位置について理解し、正しく書くことができたか。		

図3 『小学書写 1』教師用指導書 教育出版株式会社刊

この「用具のあつかい方」、つまり用具の配置という部分は、指導者側の配慮さえあれば極めて単純に「右手書字の方法を、左手書字に転移させて活用しよう」で済む問題であろう。しかし、総てがこのような事例ばかりではない。前ページに図3として掲げているのは、書字の際の利き手の問題と直接関わる事項ではないが、少々、複雑化した問題として考えてみるべき内容であろう。

説明事項が数多くあることから、各種研究会や研究授業で目に触れる機会が多い題材である。指導者はマス目を4つに区切り、「1のお部屋でなく、2のお部屋に書きましょう」と言葉を添えながら学習を展開する。文字を習得し、活用に移った段階の学習者にとっては、この「ますめの なかの かく ところ」は難解な学習の一つであろう。ここで扱う拗音・促音だけでなく、記・符号までも含みながら学習は進行していく。

教師用指導書においては、「基準」という表現さえも用いられ、書き方の徹底が図られる。しかし、このページを含む総てのページを通覧しても、これが「縦書きに限定した書き方である」との但し書きは見られない。この学習の果てに行き着くのは、一般社会で加速度的に増加する横書き書式への対応である。その際、指導者は「これまでに学んだ内容を使って、横書きで書いてみましょう」と指示を発する。しかし、図4のような現象が生じることに對しての具体はない。

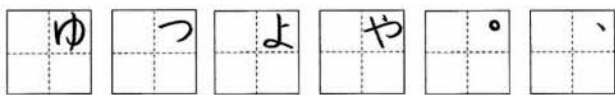


図4 横書きした際の不適合

先に数的優位という表現をとったが、ここでは決して数的優位でない実状を、自らの担当領域を中核のものと信じ、数的優位であると錯覚してしまっている学習指導の様が見て取れるのである。つまり、学校教育全体の中で、縦組みによる教科書を用い、縦書きで学習記録を行うのは、僅かに国語科と書写に過ぎない。縦組みであった社会科の教科書も、既に昭和60年代に横組みに変更されている。しかし、自らが縦書きすることを前提としているがために、他の状況を客観的に捉えようとする方向性を明らかに見失っていると指摘できよう。

「縦書きでの学習であるから、縦書きの方法であることのことわりは不要である」との論は、あまりに利那的で馴染まない。「生きて働く書写力」を言い、「生涯を通じて学び続ける」と言いながら、未来を見通す

ことのない学習が展開されるのは矛盾である。決して数的優位でない実状を、数的優位と錯覚し、他の学習への転移を求める学習は孤立を深めるだけである。

以上述べてきたように、数的優位にある、あるいは数的優位にあると錯覚している方法を短絡的に反転・逆転し、数的劣位の側に活用を求めるのは無謀であろう。特に書字という手の機能性を活用する行為については、そのような短絡的方法で解決がつく問題ではない。詳細については後段で述べることにする。

Ⅱ. 利き手に対してのいくつかの知見

我々が生活を展開する中では、疑うこともなく右利きに優位な日常が繰り広げられている。そのため、使われる用具・用材や環境は、右利きに適応することを基盤にデザインされているのが通常である。卑近な例をあげれば、駅の改札におけるカード認証や自動販売機のコインの投入口、扉の開閉やハサミ等々もことわりがない限り右利き仕様であり、それが当然のことのように認知されている。考えてみれば、我々が言語生活の基本としている文字の創出自体が右利きの特性を色濃く示していることから、社会的少数であった左利きには、生活する上での困難が常に付き纏ってきたということになる。その傾向が如実に表れていたのが、「左利きを矯正する」という表現であり、まるで左利きが正当でないかのように変更を求められる実態が長年続いていた。

昨今、「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」という視点での平等性が重視されるようになり、少なくとも以前に比して右利き・左利きについても格差が解消され始めたが、それでも児童・生徒が多くの時間を過ごす学校生活においては、学習環境の平等性ということは未だ完全には保障されてはいない。また、「バリアフリー」と「ユニバーサルデザイン」は、対象とする事柄や内容的に異なりがあり、総ての人々が共通に享受するものでもなく、今後の発展を見守らない限り安堵できない傾向であろう。

平等性の確保という観点で考えれば、最も問題となるのは右利き社会で創出され、右利きに適するよう開発・進化してきた文字そのものとどう対峙するかであろう。しかし、字形を変更することや書字の際の基本運動を変更することは、字形・字体が固定化された現代社会においては既に不可能と考えられる。まして、文字が右利き社会で創出されたことを短絡的に非難し続けたとしても、何一つの新しい成果を見出すことは

できまい。

「左利き」という表現は、「利き手」という狭い領域に限られるものではない。スポーツにおいて指導の要点とされる利き足を初めとし、利き耳や利き目なども組上に上る場合がある。社会的には不便とされる左利きも、目的に応じて有利か不利か論じられるものであり、スポーツという領域では予測できない運動性を示すという点で有利に働く場合がある。有利な特性は伸長すれば良いが、逆の場合は解決の模索がなされる。その象徴的な例が、左手による書字という現実であろう。

なぜ右利きが多数で、左利きが少数なのかについての研究も進んでいるが、未だ決定的な理由は見つけられていない。

前原勝矢著の、『右利き・左利きの科学』（講談社1989年）では、利き手等の左右の構造や能力に対して、具体的例をあげながら様々な「利き」の違いを解説している。

図5は『右利き・左利きの科学』から引用した、「フランスのロート・ベシュメルル洞窟に残された後期石器時代人の右手の手形」と「過去500年の芸術に見る右利きの頻度」である。これらを示しながら、前原は以下のように「利き手」について述べている。

石器時代後期になると、洞窟の壁に手形を押す習慣が見られます。その手形を調べると右手の方が多いです。（中略）表1・1は（注上掲の図5）紀元前300年から今日までの約500年間に創られた芸術作品から、推定した右手利きの割合です。すべての時代を通して右手利きの割合は、約90パーセントと一貫しているのがわかります。

注：引用中の表1・1とは、下掲の図5である。

年 代	件 数	右手利き頻度(%)
紀元前3000	39	90.0
2000	51	86.0
1000	99	90.0
500	142	94.0
0	134	97.0
紀元 500	42	93.0
1000	64	89.0
1200	41	98.0
1400	50	88.0
1500	68	93.0
1600	72	94.0
1700	71	93.0
1800	101	94.0
1850	39	97.0
1900	77	92.0
1950	90	89.0
平均		92.6



図5 「フランスのロート・ベシュメルル洞窟に残された後期石器時代人の右手の手形」と「過去500年の芸術に見る右利きの頻度」『右利き・左利きの科学』から

表を通覧する限り、右手利き（右利き）の頻度は歴史的変容は少なく、ほぼ一定であることを示している。前原は、以下のように論を括っている。

つまり、利き手は時代や文化を超え、人類の共通の特性であり、常に右手利きが優位であることが示されています。

では、なぜこのような右利き社会の中で、左利きが生まれてくるのだろうか。昨今の目新しい主張となる「男性ホルモンの影響」について、論者は本研究に先立つ「伝統的な書写指導の誤解と問題点の指摘Ⅱ」において、

「胎児が子宮の中で過剰にテストステロン（男性ホルモンの一種）を浴びると左利きが発生する」は、「ひとつの理論」とエド・ライドも言う通り確実なものとして論証されているわけではなく、あくまでも想定され得る一つの理論でしかない。他にも数多くの説等が存在するが、同様に確定されたものは皆無に近く、状況として「右利き優位」という実態のみが我々の眼前に存在している。

このような状況から考察すれば、左利きが少数となる理由は以下の3点に絞ることができよう。

- ①生物学的な立場
- ②西洋的文化や思想の影響
- ③漢字（漢字から派生した仮名を含む）を書字する際の運動性

と可能性を例示するにとどめている。つまり、未だその原因については特定されないということになる。

前原の統計によれば、僅か8%に満たない左利きが数的劣位の立場になったことは明らかである。その数的劣位が数的弱者と置き換えられ、まるで悪であるかのように「矯正」という名の元に右利きへの転向を求められたことも、歴史の中には記録されている。最近の社会的傾向としては、この「矯正」という言葉は消えつつある。さらに、右利き社会の中での存在や地位を確立させるために、「左利きの子に対してどのような支援をなすべきか」が課題とされている。

それを示している例として、ローレン・ミルソム著の『左利きの子—右手社会で暮らしやすくするために—』等があげられる。この著には、書写教育で扱う書字に関することを含め、左利きが右利き社会の中で直面するであろう困難や、左利きが特性を発揮する事項までが概論的に紹介されている。「おわりに」には、以下の内容が述べられる。

左利きの子どもは非常に創造的な子どもが多

く、保護者や教師からの配慮や励ましがあれば、右利き偏重社会で直面する障害の多くを乗り越えることを学べます。学び始めの時期に無意味な障害を取り除けば、子どもは自信をもってスポーツや音楽、芸術的な活動に挑戦し、成功を収めるかもしれません。そしてその過程で適応性を磨き、自信をもって学校生活を送り、成長していくでしょう。

情緒的表現ではある。しかし、その中に、「数的劣位に挫けることなく、自信を持って生きていけ」というミルソムの励ましがこもっている。それは言うまでもなく、左利きの子どもたちが辿ったであろう苦難の道を暗示している。

ミルソムが「おわりに」で述べる「適応性」は、『左利きの子—右手社会で暮らしやすくするために—』の本文中では、「妥協」や「順応」などの言葉で説明されている。

図6として掲げるのは、同著から抜粋・引用したものである。鍋の注ぎ口は、右利きが使うことを想定してつくられた物である。それを左利きが使用する場合は、不自然かつ使いにくい状況を生む状況を例示している。鍋のデザインが変更されないものであるとしたら、左利きは妥協や順応をし、利き手ではない右手で使用したり、図6のように腕を外側へ回転させて使用したりする事例である。つまり、それをミルソムは「適応性」と表現しているのであろう。



図6 左手に鍋を持っている子『左利きの子』から

「教師からの配慮や励まし」は、学校教育に期待する部分であろう。実際の、学校教育の現場では、前述の数的劣位であるがゆえに左利きの児童生徒に対する具体的な配慮や支援が欠如する場合も多い。求めているのは優遇でも、過度の支援ではない。右利きも左利きも平等に、教育を受ける権利を確保するというところに他ならないのである。

Ⅲ．筆記具の持ち方に関する分析と考察

平成20年版の小学校学習指導要領の「書写に関する事項」の中に述べられている「各学年における書写に関する事項」の「第1学年及び第2学年」では、「ア姿勢や筆記具の持ち方を正しくし、文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと。」「イ点画の長短や方向、接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って文字を正しく書くこと。」を内容としている。文字を学習する初段階の時点で、執筆法等の基礎・基本を徹底して指導するが、以降の書写力や書字するという能力を左右するとの考えを見て取ることができる。

幼稚園教育要領には明示されていないが、就学前の児童も文字を書いたり、絵を描いたりという活動は日常的に行っている。しかし、それは多くの場合、自学自習の形となり指導が加えられるものではない。その児童が小学校に入学するやいなや、鉛筆を用いた本格的な文字学習が始まる。当然、初めて文字を書く児童も、初めて鉛筆を持つ児童もいる。文字活用とまではいかないまでも、文字習得し技法習得に取り組む児童の負担は並みではあるまい。「基礎・基本の徹底」が唱えられた際、「繰り返し、繰り返し、徹底する」という表現が添えられたが、小学校一年生の段階では、下掲の図7のような資料を参照しながら持ち方の指導が行われる。ここでは、指導者の指導指針となる朱書きが加えられた教師用指導書を参考として掲げている。



図7 『しょうがく しょうしゃ1』における「はじめのがくしゅう」の教師用指導書 教育出版株式会社刊

昨今、「正しい箸の持ち方ができない若者」が社会的な話題となっている。にもかかわらず、小学校一年生に対して箸の持ち方を説き、敷衍して鉛筆の持ち方に至るという旧態依然とした指導法の提示には啞然とするが、「徹底して指導を繰り返す」との決意が垣間

見える、学習要素が盛り込まれている見開きページである。

特に「鉛筆の持ち方」については、

- ・親指は、人さし指より上になる。
- ・人さし指は、角ばったり力を入れたりしないように。
- ・削り際りの少し上を持つ。

との朱書きが加えられた上に、裏表紙には「えんぴつのもちかた」の図を再掲している。(図8)



図8 『しょうがく しょしゃ1』教師用指導書の裏表紙より「えんぴつのもちかた」補助図版 教育出版株式会社刊

学力観の変化により、以前のような「正しい持ち方」が論じられることはない。正しいか正しくないかではなく、適しているか適していないかが問題であり、「正しい」という規範性を忍ばせたとしても、せいぜい「よい持ち方」程度の表現が適切なのであろう。当然、求められているのは、文字を書く上での機能性に裏付けされたものであるべきである。その立場から考えれば、朱書きの注意書きは形式的で些末であろう。機能面からの、「なぜ、そうならなければならないのか」を説かない限り、学習者の理解は表層的なものとなる。

鉛筆の持ち方については、さらに図9までも掲げられる。

これだけ指導上の留意点が施され、繰り返されるにも関わらず、児童生徒の筆記用具の持ち方は改善される兆しささえ見えない。改善を妨げる第一の要素は、これまでも論者自身が繰り返し述べている「筆記用具の変化」であろう。

江戸末期から明治にかけての西洋文化の移入により、石版と石墨、さらには鉛筆やペンを使った書写への対応が求められた。しかし本来、日本には硬筆筆記



図9 教科書に掲載のよい執筆法(教育出版株式会社から)

用具の持ち方は存在しない。そのため、筆軸の太さや構え方が近似する毛筆小筆の持ち方を、硬筆筆記用具の持ち方にスライドすることで対応したのではない。急場凌ぎとも思える対応が、以降の筆記用具の変化に適合せず、いわゆる「よい持ち方」と現状の遊離が始まったと考えられる。具体的に言うならば、当初の毛筆小筆や鉛筆という紙面を押す力を拡散させるクッションのような働きをする用具でなく、シャープペンシルやボールペンという硬質な用具の登場により、紙面からの反発を手指が直接受ける形となったことである。さらに、流線型のデザイン優先の筆記具の開発は、保持する手指から用具が抜け落ちていくのではないかという不安との戦いを生じさせた。

通常、図9として示す通り、筆記用具は親指・人差し指・中指の3指で保持される。「文字を書く」という動作は紙面に対して力を加えることであるから、その力が強ければ強いほど紙面からの反発は増加する。それが紙面からの抵抗であり、いわばマイナスに働く力ということになる。筆記用具が手の中から抜け落ちないためには、3指に強力な力を加えて保持する必要がある。それが後掲の図10として示す握り込みや、指の反り返りという問題点として視認されるわけである。

「第4の支点、見つけた」という衝撃的なフレーズで登場したのが、図11として掲げるぺんてるの開発

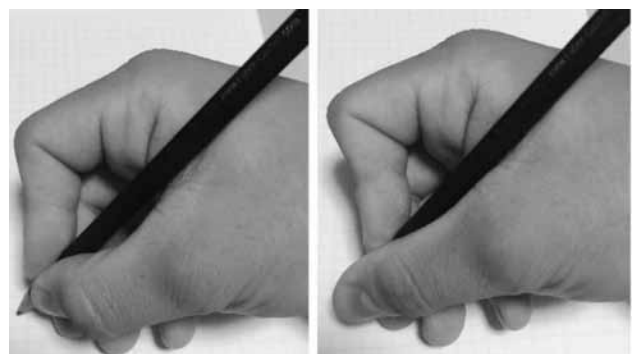


図10 親指の付け根に鉛筆をおいて書く例

筆記を科学した
人間工学が実現した

新色
メタルカラー
限定発売

WINGGRIP

ERGONOMIX
エルゴノミクス
Ball Point pen G

新たな視点で、第4の支点。

새로운 시점에서, 제4의 지점
これまでの常識を越えた、全く新しい筆記具「エルゴノミクス」
지금까지의 상식을 넘은, 완전히 새로운 필기도구 '에르고노믹스'

指紋ピッチのパターンを施した:
新感覚でありながら、自然な握り

これまでの筆記具はすべて、親指・人差し指・中指といった3点での支持による握りやすさを追求してきました。
しかし、ぺんてるでは、さらに親指と人差し指の中間点にある4点目の支持ポイントに着目。この「4つの支点で持つ」という全く新しい発想で生まれたのがエルゴノミクスです。

第4の支点で筆記をアシストする 新考案「ウィンググリップ」。

제4의 지점에서 필기를 어시스트한다. 신재안 '윙그립'

数々のモニターテストの繰り返しから科学的に導き出された、羽のような形状のウィンググリップで4点目を支えることにより、安定したホールド感が得られ、これまでの筆記具にはない握りやすさと疲れにくさを実現しました。

千葉大学人間生活工学研究室と共同で研究。
科学的に検証し、実証された、驚異の筋力負担軽減率。

지바 대학 인간생활 공학 연구실과 공동으로 연구, 과학적으로 검증해, 실증된, 경이의 근육부담 경감율

図 11 ペンてる「エルゴノミクス」の広告資料

した用具「エルゴノミクス」である。ぺんてる株式会社中央研究所，千葉大学工学部デザイン工学科，千葉大学大学院自然科学研究科の共同研究で，日本人間教育学会関東支部第35回大会で発表された「書きやすく，疲れにくい筆記具の研究」を基盤とした商品開発となっている。商品開発にあたったぺんてる商品企画本部白井氏は，次のように述べる。

「第四の支点」の考え方ありきで生まれました。人差し指と親指の間でペンを支えていることを発

ウィンググリップの効果は，ぺんてると千葉大学との共同の研究により科学的に検証し，実証されました。また，その研究内容は日本人間工学会 関東支部 第35回大会で発表されました。

「書きやすく，疲れにくい筆記具の研究」

吉原直人(1)，横内伸生(1)，下村義弘(2)，岩永浩一(3)，勝浦哲夫(2)
(1)ぺんてる株式会社中央研究所
(2)千葉大学工学部デザイン工学科
(3)千葉大学大学院自然科学研究科

筆記時の力の入り方徹底図

筆記具に対する力の入れ方が，これまでの筆記具と異なるため，筋力負担が軽減します。

筋力負担度の比較

ウィンググリップ使用時の優位性はもちろん，他の製品との比較においてもその効果が実証されています。



ウィンググリップは，手の大きさや持ち方にフレキシブルに対応します。

윙그립은, 손의 크기나 가지는 방법에 유연하게 대응합니다.

ウィンググリップ高さの調整

윙그립 높이의 조정

ウィンググリップ角度の変更

윙그립 각도의 변경

固定解除ボタンを押しながらウィンググリップを左にスライドさせ，手の大きさに合った高さに調整することで角度が変更ができます。



ウィンググリップは，邪魔にならない開閉式。

윙그립은 방해가 되지 않는 개폐식

ウィンググリップは開閉式なので収納・携帯時の邪魔になりません。もちろんウィンググリップを開いたままでの使用も可能です。



3点のフィット感を向上させる指紋ピッチ。

指紋ピッチのパターンを施したグリップは，指先の滑りやズレを最小限に抑え，フィット感を向上させました。新感覚でありながら，自然な握りが体感できます。

見し，それを抑えることで筋力負担が軽減するという効果も実証できた。

じゃあ実際に第四の支点を支えるにはどうしたらいいのだろうか，と考えて作りました。

極めて興味深い発言であろう。つまり，氏がまとめとして掲げる，「あくまで機能というか…思想を体现するために生まれたものなのです。」には，その象徴的とも思える指針が示されている。つまり，書写という「よい持ち方」などは眼中になく，現実的に持ち

方がそうになっているのだから、そのことを改善すればいいことだとも受け取れるのである。基礎・基本として頑なとも思えるほど書写教育が押さえ続けてきた事項であるが、そんな教育の考え方とは明らかに一線を画する考え方ではあるが、世の中の動向としては押さえておかなければなるまい。同様の考え方の筆記用具は、かなり以前から登場しているので、図 12 として補足的に掲げておく。さらに、最近では特別支援教育の立場から、同様の筆記用具が数多く登場している。

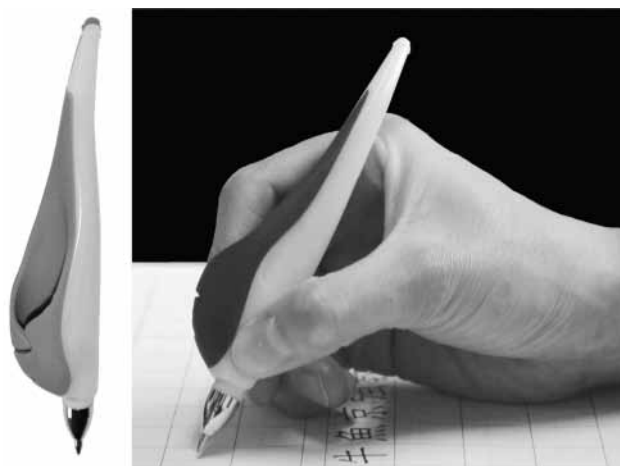


図 12 「フィンガーメイト」と呼ばれるボールペンの形状

Ⅳ．右手書字の際の筆記具の持ち方を反転させる問題点

実際の授業の場での指導は、「左利きの人は、右利きの方法を逆にして考えてみなさい」と極めて簡単な形で行われる。その指導は、果して有効に機能するものであろうか。図 8 として掲げた「えんぴつの もちかた」を左手書字のように左右反転したものを、参考までに図 13 として掲げる。

「数的優位の方法を反転させ、数的劣位の側の対応とする矛盾について」を本論の副題として掲げ、本論の章Ⅰでも他事例を掲げて論述しているが、主たる内容と考える部分を説明し、他の部分については反転して省略してしまうという指導は、時として大きな過ちをおかすものであろう。ここで掲げる右手書字の方法を反転し、左手書字の方法へと置き換えるなどが、その典型と考えられるものである。

通常、範書として示される字例は、微妙な右上がりの形態で示される。それは右手書字による特徴的な形態であり、それを左手で書き示すこと困難は言うまでもない。「右手書字でも難しい」との論もあるが、そ



図 13 左手書字用に図 8 を左右反転したもの

れは右手で書くという構造的に示される右上がりの線を、微妙に制御しながら整えていく行為が加わっているからに他ならない。右手書字と左手書字の困難性は、根本的に異なるものである。

図 14 を参考に、保持する手指の運動を簡単に分析してみたい。



図 14 文字を書く時の指の動きの方向性

通常、筆記用具は、親指・人差し指・中指で保持し、用具と 3 点で接する。鉛筆の軸が 3 角形、または 6 角形で作られているのも、この理由による。3 指は互いが補助し合いながら微細な動きを繰り返すことから、単純に動作の方向性を切り出すことは難しいが、主として働く方向性をモデル化しながら考えてみることにしよう。

- ・親指…主として保持(つまむ)と、横方向への運筆を行う。本来は可動域が狭隘な手指であったが、携帯電話やゲームコントローラーの操作から見て分かるように、格段に機能性を向上することになった。
- ・人差し指…主として保持(つまむ)と、上下方向

への運筆を行う。毛筆小筆の学習などでは、小筆と人差し指をテープや輪ゴムで固定し、動きを習得するという方法が導入されることもある。また、「字形イメージをなぞる指」としての働きも衆知の通りである。

- ・中指…主として保持(用具が上に載るという特異な手指である)と、用具を跳ね上げる補助として働く。点画のハネ等を書くことができるのも、この中指の働きによるところが大きい。

当然、この手指の運動に適應する点画は書き易く、不適應な場合は書き難いということになる。微細な精神運動と言われる文字を書くことも、その根底となっているのは手指の運動特性ということになる。

全国大学書写書道教育学会が小学校教員養成における大学授業用テキストとして編集した『4訂 書写指導〔小学校編〕』には、「点画の終筆の方向による分類」として、図15を掲げている。

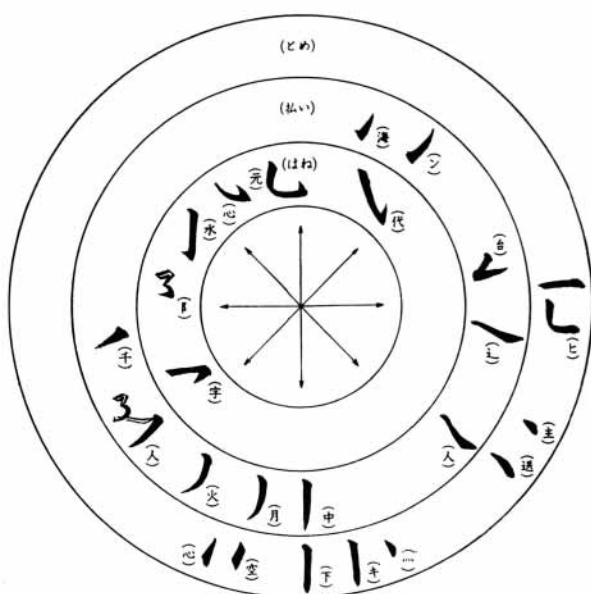


図15 点画の終筆の方向による分類

『4訂 書写指導〔小学校編〕』全国大学書写書道教育学会編

中指は特異な働きをする手指と先に述べた。用具が上に載るということから、用具を押し上げることを可能にする特殊な働きは、図15のうちの「← ↑ へ」の方向への運筆を司ることになる。数量的に僅少な「へ」の方向は、親指によって運筆されていると考えられる。

では、実際の指導での、「左利きの人は、右利きの方法を逆にして考えてみなさい」は有効なものかを顕彰してみよう。

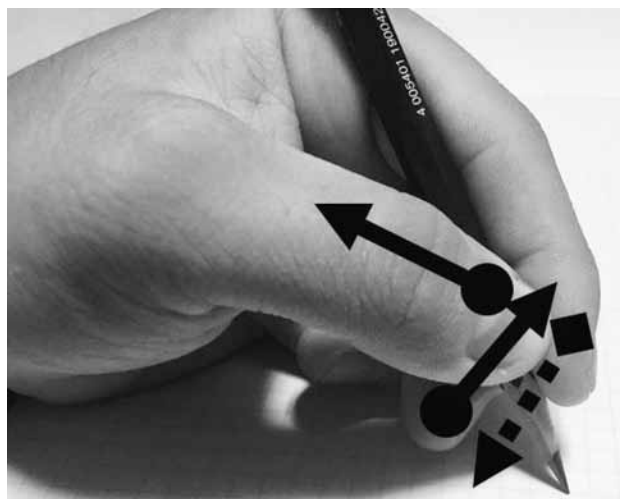


図16 左手書字の学習者の場合

親指…主として保持(つまむ)と、横方向への運筆を行う。右手書字では「→」であったが、左手書字では「←」の方向となる。

人差し指…主として保持(つまむ)と、上下方向への運筆を行う。人差し指については、右手書字の場合と大きな差異はない。

中指…主として保持(用具が上に載るという特異な手指である)と、用具を跳ね上げる補助として働く。

右手書字では「へ」であったが、左手書字では「へ」の方向となる。

以上をまとめると、手指の司る運動の方向性は、下に掲げる表1のようになる。

表1 書字の際に手指が司る運動の方向性

	親指が運筆する方向	人差し指が運筆する方向	中指が運筆する方向
右手書字	→ ↗ ↘	↓ ↙ ↘	↖ ↑ ←
左手書字	← ↖ ↙	↓ ↙ ↘	↗ ↑ →

つまり、各手指の働きに違いが生じていることから、短絡的な図の反転と右手書字の活用という指導言だけでは、対応できるような問題ではないのである。極端な場合、右手書字の場合の親指の働きを左手書字では中指が、右手書字の場合の中指の働きを左手書字では親指が担っていると言っても過言ではない。「伝統的書写指導の誤解と問題点の指摘 II」において、書字するオバマ大統領の図を掲げたが、以下に掲げる図17のような回腕法がごとき執筆法が登場するのも、無理からぬことと思われる。

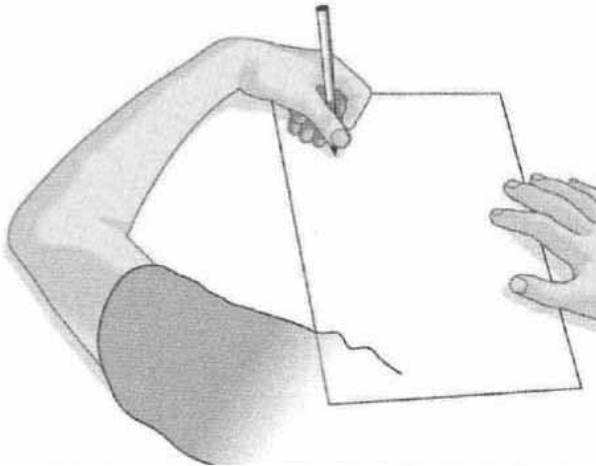


図 17 手を巻き込むような持ち方の例『左利きの子』から

表 2 は、『明解書写教育』に掲げられる「学習漢字点画分類表」である。

表 2 学習漢字点画分類表『明解書写教育』から

分類の 観点 点 画	送 筆		方 向	終 筆			割 合 (%)
	形 状			はらい	止 め	は ね	
	丸	角					
画			横 画	×	○	○	30
	折 れ		(横→垂直)	×	○	○	3
			(横→斜め)	○	○	○	7
			(その他)	○	○	○	2
			縦 画	△	○	○	18
			左 払 い	○	×	×	10
			(右上払い)	○	×	×	4
			右 払 い	○	×	×	3
	<u>そり</u>		(右下・縦)	×	×	○	1
<u>曲がり</u>		(縦→横)	×	○	○	1	
<u>点</u>			○	○	○	17	
複 合 画			○	○	○	4	
合 計			25	67	8	100	

手指の動きと運筆ということで論を展開してきたことから、注目すべきは、構成画の比率となる。最多の構成画は 30% の横画、第 2 位は 18% の縦画、第 3 位は 12% の折れ、続いて 10% の左払いとなる。この結果は、右手書字の場合は安定的な運筆（親指と人差し指を主とし、中指を補助的に添える）で 60% の点画を書くことができることを示している。更に、左斜め上からの打ち込みを必要とする点の 17% を加えれば、77% という驚くべき数字となる。

一方、左手書字の場合は、最も数量的に多い横画、横から縦・縦から横へと展開する折れが、用具を上

載せているという不安定な中指によって行われることから、極めて難度が高い点画となってしまう。つまり、僅か 18% が左手書字に適した点画ということになる。これでは書字困難となるのは当然で、用紙の置き方や視野を確保するための姿勢の指導、併せて手指の運動だけでない腕法への工夫が求められるところである。

V. 左手書字の学習者への支援に向けて

『左対右きき手大研究』の著者八田武志は、その著の中で眩きのような言葉を発している。

実際に、左ききは習字の時間に苦労してかわいそうなどと聞いたこともあるし、世の中の道具は右きき用に作られているので左ききは不便であり、さらに左きき用の道具はおおむね高価であるのも事実である。

確かに従来言われてきた事柄であり、全てを間違いと断じることはできない。しかし、これらの言葉の背景として、右利き社会の中で過ごしてきた左利き特有の考え方を見出すことができよう。それは偏に数的優位にある右利きの社会が生み出したものであるが、こと書字・書写という技法的部分に至る前に解決しておかなければならぬことであろう。上掲の八田の眩きのような言葉に敢て反論するならば、次のような内容になる。

「左ききは習字の時間に苦労してかわいそう」というが、「習字」という表現が示すように、それは毛筆書写に関してではないのか。確かに、基本的に左斜め上 45 度から打ち込みを開始する毛筆書法は、右利きに適していると考えられる部分である。しかし、一つの例として左右の手の肘を机上に固定し、軽く振ってみると新しい発見があるに違いない。まるで車のワイパーのように振られる左右の手の軌跡は、右手が「↙↗」、左手が「↘↖」となるはずである。右手書字によって創出された文字が、上下の文字を連続させる際に出現する連綿線は、明らかに「↙」の方向をとることが多いのも、その腕の運動の特性ゆえのことであろう。

しかし、翻って考えれば、右手書字の特性は増幅される反面、左手書字の特性が喪失したかのように論じられないのはなぜか。もう一度、先ほどの「車のワイパーのように振られる左右の手の軌跡は、右手が「↙↗」、左手が「↘↖」となるはずである」の例示を引き出してみれば、逆に「左斜め上 45 度」で打ち込まれる起筆は、左手書字の得意とする基本運動ではな

いのか。一般的に執筆という表現がとられるが、用具の持ち方や手指の働きに論議が集中し、毛筆書写で重要な位置を占める腕法への視点は曇りがちである。しかし、以上のような腕法から考えれば、左利きに不利な条件ではない。

「世の中の道具は右きき用に作られている」は、ある意味、必然の社会の原理であろう。例えば我々教育関係者が教育の現場で呟く、「教育に関してのDVD等の教材は高価で手が出ない。結局、多くの人が購入し、数多く製品化される一般的なDVDよりもコストが掛かることが原因か」に匹敵する表現である。そこに視点が向けられない、数量的に少ないことから、開発にしても、製品化にしても対費用効果が求められないのである。しかし、遅きに過ぎるとの指摘はあろうが、本論Ⅱで触れた「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」との視点から、数多くの商品が市場に回り始めているのが現状である。更に差別化はしないとの方向性から、左利き用が高価という傾向は消失し始めている。

本項のきっかけとした八田の言葉を再度考えてみると、「偏に数的優位にある右利きの社会が生み出したものである」が意図する部分が理解されるのではないだろうか。

「左利きだから書けない」や「やっても無理だから」は教育現場で繰り返し聞いた言葉である。それは俗な表現で置き換えるならば、「どうせ」という挫折感に彩られたものであったのだろう。学習にあたって何より重要なのは、成し遂げようとする学習への意欲であり、成し遂げるために繰り返す創意工夫する態度であろう。その部分が、圧倒的に欠落しているのではないかと感じられる部分がある。右利きで通用する方法を安易に反転して押し付けるのではなく、たとえそれが右手書字の方法にそぐわないものであったとしても導入し、意欲や創意工夫する気持ちをかきたてていく、日常の学習活動への継続的取り組みではないだろうか。文字を書くことを嫌う指導者の学級が、同じように文字嫌いになっていく状況と近似している。まずは、忌避する気持ちを払拭するための、ためまぬ取り組みが求められると思う。

おわりに

本年度の全国大学書写書道教育学会第31回(岩手)大会の発表題目の中に、「利き手・非利き手での書字活動時における脳血流動態の比較—NIRS及び筆圧

握圧計則装置による測定を通しての試論—」(信州大学小林比出代)という発表題目があった。氏の取り組みについては継続的に注目してきたが、かつての研究題目に添えられていた「書写教育の見地から」が外れた様を見て、いわゆる脳科学の領域に踏み込んでしまったという感を深めた。発表要旨にも、「大脳皮質の脳血流の変化を、近赤外分光法によって計測する」「頭皮ヘモグロビンと脱酸素化ヘモグロビンそれぞれの濃度の変化を多点で測定し、その血流変化を脳表面に沿って画像化する」とある。研究の在り方について非難するつもりは毛頭なく、その研究の成果を期待するものであるが、一人の実践者が消えたという思いを深めた。

日常的に発言することであるが、研究という領域には研究の実践者と実践的研究者が存在する。その研究と実践を結ぶ「融合」という考えがなくては、教育研究は進展しない。本紀要が「人間教育」を標榜するならば、他の一般的な研究者のように理論的・技法的な解決に終始するのではなく、人間の根底にある意識の改革を実現することも必須の使命ではないか。それこそが、他にはない人間教育を原点にした実践研究ではないかと考える次第である。

【引用・参考文献】

- 『4訂 書写指導 小学校編』全国大学書写書道教育学会編 平成12年4月1日
- 『明解 書写教育 増補新訂版』全国大学書写書道教育学会編 平成25年4月1日
- 『小学 書写3』教育出版株式会社刊 平成13年1月13日検定済み
- 『小学 書写3』教師用指導書 教育出版株式会社刊 発行年月日非記載
- 『しょうがく しょしゃ1』教師用指導書 教育出版株式会社刊
- 『小学 書写1』教師用指導書 教育出版株式会社刊 発行年月日非記載
- 『左対右きき手大研究』八田武志著 株式会社化学同人刊 2008年7月20日
- 『右利き・左利きの化学』前原勝矢著 株式会社講談社刊 1989年6月20日
- 『左利きの子』ローレン・ミルソム著 東京書籍株式会社 2009年5月2日